

モヨロ文化市民講座

## オホーツク文化 調査の今昔

～70年前のガラス乾板と2年前の発掘調査～

2018

網走市教育委員会

モヨロ文化市民講座 開催要項

オホーツク文化 調査の今昔

～70年前のガラス乾板と2年前の発掘調査～

1 開催趣旨

70年前のモヨロ貝塚の発掘調査を記録したガラス乾板写真をもとに、モヨロ人の暮らしを再検討するとともに、2年前に行われた斜里町ウトロでの発掘成果ともあわせ見ながら、オホーツク文化研究の最新の到達点を専門家が解説します。

2 主催

網走市教育委員会：網走市立郷土博物館

3 日時

平成30年（2018年）10月21日（日） 14：00～15：30

4 会場

エコーセンター2000 2階大会議室（網走市北2西3）

5 日程・内容

13：30 受付

14：00 開会

主催者挨拶 網走市教育委員会教育長 三島 正昭

14：10

講演会

演題 「オホーツク文化 調査の今昔」

講師 熊木 俊朗 氏（東京大学大学院 准教授）

15：20 質疑応答

15：30 閉会

【講師略歴】 熊木 俊朗（くまき としあき）氏

東京都生まれ。考古学・オホーツク文化を含む北東アジアの考古学研究者。  
北海道大学文学部言語学専攻課程卒業後、明治大学文学部考古学専攻卒業、  
東京大学大学院考古学専門分野修士課程修了。平成8年(1996年) 東京大学  
文学部助手。平成15～20年度のモヨロ貝塚の発掘調査を中心となり実施。  
平成18年(2006年)より東京大学大学院人文社会系研究科准教授。

<主な論文・著書>

- ・2002年 「オホーツク人と死」  
『北の異界 古代オホーツクと氷民文化』 東京大学総合研究博物館
- ・2003年 「道東北部の続縄文文化」 『新北海道の古代2 続縄文・オホーツク文化』  
北海道新聞社
- ・2009年 「オホーツク式土器の編年と各遺構の時期について」 『史跡最寄貝塚』  
網走市教育委員会
- ・2014年 「オホーツク文化と周辺諸文化の交流」 『歴史と地理』 山川出版社
- ・2018年 『オホーツク海南岸地域古代土器の研究』 北海道出版企画センター

# オホーツク文化 調査の今昔

## —70年前のガラス乾板と2年前の発掘調査—

### はじめに

オホーツク文化は私の主要な研究テーマの一つですが、最近、この文化に関する二つの研究に関わる機会がありました。一つは、約70年前にモヨロ貝塚でおこなわれた発掘調査の際に撮影された、ガラス乾板の保存と公開の事業です。デジタル化された昔の写真を現在の研究の視点から改めて見直してみると、驚くような発見がありました。もう一つは、2013～2016年度にかけておこなわれた、斜里町チャシコツ岬上遺跡の発掘調査です。斜里町教育委員会が実施したこの調査において、私は調査検討委員として関わり、調査の成果について関係者と検討を重ねてきました。その結果、この遺跡の持つ重要性が明らかになってきたのです。今日は、この二つの研究についてお話しします。

### 1. モヨロ貝塚 昭和22年・23年・26年調査のガラス乾板から見えてきたこと

#### ①ガラス乾板写真と「デジタルアーカイブズ構築事業」について

昭和22年・23年・26年に、東大・北大・網走市などの研究者からなる「モヨロ調査団」によって、モヨロ貝塚の発掘調査が実施されたことはよく知られています。現在、常呂実習施設には、この調査の際に撮影されたガラス乾板が200枚所蔵されています。報告書（『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』）に掲載された遺構の写真の大半を含んでおり、この調査の記録や出土遺物の情報が入手しづらい現在では、まとまった記録として極めて重要な資料になっています。

常呂実習施設では、2002年に200枚中の50枚をデジタル化していましたが、今年度、「東京大学デジタルアーカイブズ構築事業」にこの乾板資料が選定され、追加のデジタル化と公開がおこなわれることになりました。対象は、残りの150枚のうちの、重複した写真や遺物の写真などを除いた92枚で、これらをデジタル化し、前の50枚と合わせた142枚をweb上で公開すべく、作業を進めています。公開は2019年3月の予定です。

#### ②7号竪穴は建て替えられたものか？

乾板写真の見直しをおこなった際に最初に気付いたのは、昭和22年に調査された7号竪穴のなかに、複数の骨塚があることでした（図1）。実は、そのことは報告書や名



図1 7号竪穴(手前から炉、内側骨塚、外側骨塚)

取武光先生の著書(『モヨロ遺跡と考古学』)に記されているのですが、見落としていました。図2と図3は7号竪穴の骨塚として有名な写真ですが、実はこれは同じ骨塚ではなく、二つの異なる骨塚であったのです。

名取先生の記述をみると、竪穴の北西の壁に近い床上にはクマの頭骨9個が東向きに並べられ、貼床の北西の端にはクマやシカや海獣の骨が積まれている、とあります。画像の検討の結果、前者が図2(外側骨塚)、

後者が図3(内側骨塚)に相当することがわかりました。後で述べるように、前者はクマのみ、後者にはクマ以外にシカや海獣が含まれる、という点が重要です。

次に、7号竪穴の時期です。名取先生の記述では、竪穴の北隅に底部に穴が空いた大型の土器が伏せてあったとあり、図4がそれに該当します。拡大してみると文様は刻文であり、7号竪穴はこの土器の時期(刻文期)であることになります。一方、内



図2 7号竪穴 外側骨塚



図3 7号竪穴 内側骨塚



図4 7号竪穴 北隅出土土器



図5 7号竪穴 内側骨塚出土土器

側骨塚の出土土器が今回、画像から新たに確認できたのですが、その文様は口縁部が無文で肩部に貼付文があるもので、刻文系土器と貼付文系土器の間の時期(沈線文期)に位置づけられます。図4の土器よりは新しく、同じ堅穴の出土品として矛盾が生じますが、どのように考えるべきでしょうか。

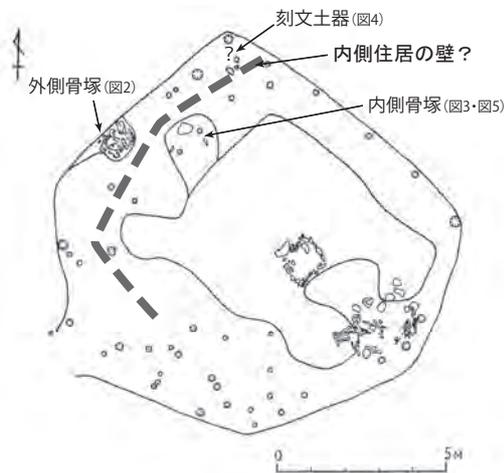


図6 7号堅穴 建て替え予想図

オホーツク文化の住居では、堅穴を入れ子状に縮小して建て替える例がしばしばみられます。モヨロ貝塚の9号堅穴やトコロチャシ跡遺跡の例が有名ですが、この7号堅穴でも同様の建て替えがなされていたと考えれば、色々つじつまが合います(図6)。すなわち、まずは刻文期に外側骨塚の位置に住居がつくられ、次の沈線文期には建て替えがおこなわれて、図6の点線の位置付近に一回り小さい住居が作り直されたことが想定されるのです。ここで重要なのが、先に述べた骨塚の内容です。すなわち、外側の

骨塚(刻文期)はクマの頭骨のみ、内側の骨塚(沈線文期)にはクマ以外の動物も含まれる、という点は、近年の研究で明らかになった骨塚の変遷の傾向とよく一致しており、建て替えがおこなわれたという想定を裏付けるものとなっています。堅穴の南西部に柱穴の列が複数あるように見えることも、建て替えを示唆しているように思われます。

### ③昭和22年・23年調査のオホーツク墓の写真

「モヨロ調査団」の調査では、特に昭和22年・23年に多くのオホーツク文化の墓が発掘されており、現在の貝塚館の西隣付近に設定されたいわゆる「貝塚トレンチ」内を中心に、二ヶ年で28基の墓が発掘されています(3号墓～30号墓)。このうち、報告書に写真の掲載があるのは12基のみで、16基は説明の文章と一覧表のみの記述となっていました。今回、この16基のうちの5基について、乾板の存在が確認できました。ほかに、どの墓の撮影なのか特定できなかった乾板が4基分あったのですが、これらは残りの11基のうちのいずれかに相当すると考えられます。ここでは、報告書には掲載されなかった乾板写真の一部を図示しておきます(図8～図11)。

これらの乾板については現在、デジタル化した画像の細部を拡大して精査し、分析を進めています。副葬土器の文様を読み取れるものなどがあり、墓がつくられた時期や副葬品の内容などについて研究が進むことが期待されます。



図 8 3号墓



図 9 8号墓



図 10 番号不明 (12号墓?)



図 11 番号不明 (28号もしくは29号墓?)

## 2. 斜里町チャシコツ岬上遺跡の調査

### ① 断崖に囲まれた大集落



図 12 チャシコツ岬上遺跡

チャシコツ岬上遺跡は、ウトロ市街地の南西、海に突き出たチャシコツ崎の頂部の平坦面上にひろがる遺跡です(図12)。平坦面と海面の高度差は約40m、断崖絶壁に囲まれ、眺望は利くが周囲からは隔絶した、極めて特異な立地環境にあります。意外なことに平坦面上には31基もの竪穴の窪みが密集しており、平面形などから、それらは全てオホーツク文化

ないしトビニタイ文化の竪穴住居跡と考えられています。北海道のオホーツク文化では、常呂の栄浦第二遺跡に次いで二番目に大きい規模の集落となります。

この遺跡では 1949 年に小規模な試掘調査がおこなわれていますが、オホーツク文化貼付文期～トビニタイ文化前半期を中心とする時期の遺跡である、という程度の情報しか得られておらず、詳しい内容はわかっていませんでした。2013 年から 4 年間かけておこなわれた今回の調査は、初の本格的な発掘となりました。

## ②オホーツク文化貼付文期後半～トビニタイ文化前半期の集落構造

発掘調査は、遺跡内に設定された 7 箇所のトレンチ内でおこなわれました。検出された主な遺構と、その内容は以下のようになります（図 13）。

5 号堅穴は、オホーツク文化貼付文期後半の時期の住居跡ですが、長軸が 5.4m と小型であり、また、開口部側にはクマの手足の骨やキツネ・クロテンなどの骨からなる骨塚が検出された一方で、奥壁側には骨塚がないなど、特異な点が目立ちました（図 14）。この 5 号堅穴の覆土中には、配石とそれに伴うトビニタイ文化前半期の土器 4 個体が検出されており、これらは堅穴の窪みを利用した遺構と認定されています。

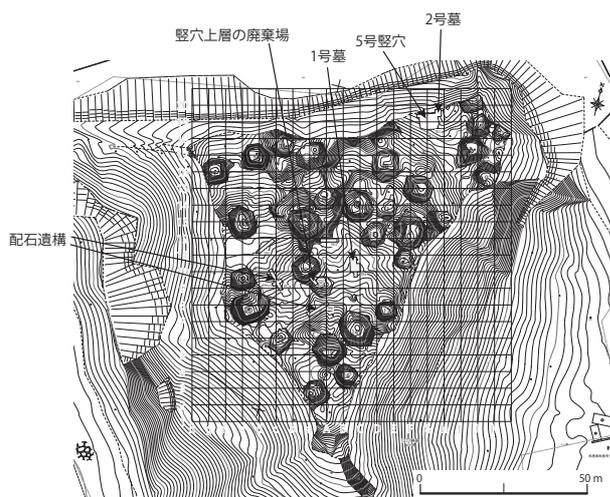


図 13 調査トレンチと主な遺構の位置

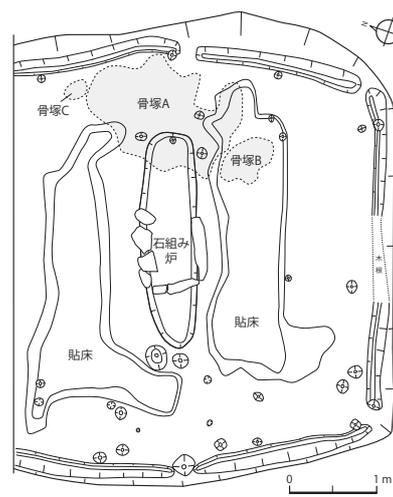


図 14 5号堅穴

墓は、オホーツク文化貼付文期後半のものが 2 基検出されています。1 号墓は若い成人の墓で、配石と被甕を伴っており、頭位は南西で、鉄製の針などが副葬されました（図 15）。2 号墓（図 16）は幼児の墓で、墓坑は浅くて小さく、遺体と副葬品（刀子、織物の断片、土器片など）、配石がいずれも墓坑の上部で検出されました。副葬品の織物は緻密に織り込まれた高品質なもので、本州産と考えられています。

動物遺体などを廃棄した跡も見つかっています。これは 22 号・23 号堅穴の窪みを利用したもので、廃棄層から確認された動物種はタラ科・サケ属・ニシン科・アイナメ属といった魚類が多く、鳥類、クマ、クロテン、アザラシなども含まれていました。



図 15 1号墓



図 16 2号墓

動物遺体以外にも、オホーツク土器（貼付文期後半）の破片や石器、骨角器が出土しており、また、皇朝十二銭の一つである神功開寶（765年初鑄）も確認されています（図 17）。これらの遺物は、貼付文期後半に廃棄されたと考えられています。



図 17 神功開寶

遺跡外から搬入された礫を用いた配石遺構も複数検出されています。上記の5号竪穴上層の配石はトビニタイ文化前半期、二箇所の特レンチ（TR2・TR6）から検出された配石はオホーツク文化貼付文期のものです。TR6の配石からは成獣二体分のクマの歯が顎骨から遊離した状態で

検出されており、礫やクマの歯には火を受けたものが認められることから、これらの配石は儀礼の場であった可能性も考えられています。

### ③チャシコツ岬上遺跡の位置づけと重要性

以上のことから、チャシコツ岬上遺跡は、竪穴住居跡、墓、窪みを利用した廃棄層、配石遺構など、各種の遺構が同一地点内に密集して存在する、オホーツク文化に典型的な土地利用のあり方を示す遺跡であることが明らかになりました。一つの集落内にこれら各種の遺構を全て併せ持つ例は、モヨロ貝塚など少数の遺跡に限られており、チャシコツ岬上遺跡も、それらの遺跡と同様、拠点的な集落と評価できるでしょう。また、この遺跡では、遺構がつくられた時期が貼付文期後半からトビニタイ文化前半期にほぼ限定される点も重要です。すなわち、住居の小型化、骨塚などにみられる儀礼の変化、トビニタイ文化への連続性など、オホーツク文化の終末期に生じた生活様式の変容に関する貴重な情報が、この調査によってもたらされたのです。

モヨロ文化市民講座

オホーツク文化 調査の今昔

～70年前のガラス乾板と2年前の発掘調査～

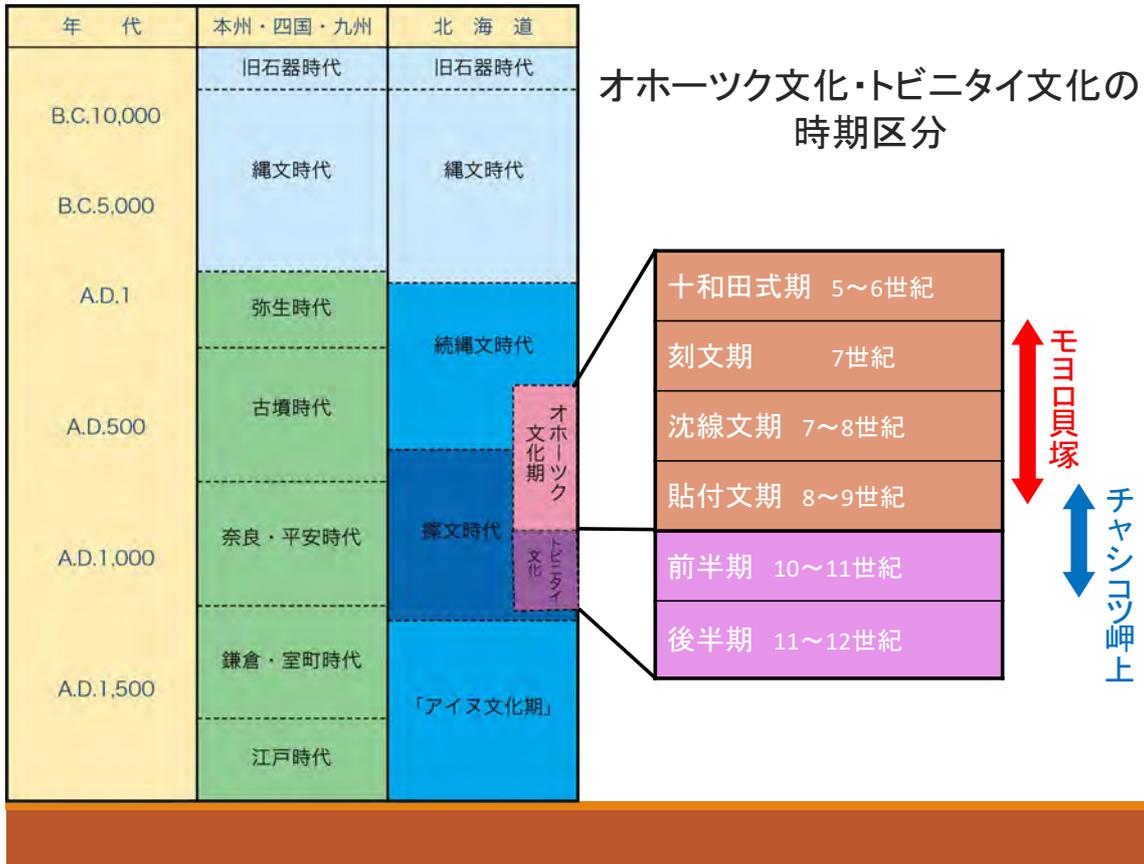
発行日 平成30年10月21日

発行 網走市立郷土博物館

〒093-0041

北海道網走市桂町1丁目1番3号

印刷 株式会社 大成印刷



#### 1947年

墓	報告	乾板	人骨	備考
3号		○	○	
4号	○	○	◎	
5号	○	○	○	
6号	○	○	○	
7号	○	○	○	
8号		○	○	
9号		○	○	
10号	○※	○	△	
11号	○	○	△	
12号			◎	老年♂被甕
13号	○	○	△	
14号			△	小児 被甕？

どの墓か不明な乾板は4基分

#### 1948年

墓	報告	乾板	人骨	備考
15号	○	○	◎	
16号		○	△	
17号			△	被甕なし木槨
18号			△	被甕なし木槨
19号	○	○	○	
20号	○	○	◎	
21号		○	△	
22号	○※	○	○	
23号			△	被甕なし木槨
24号			△	成年♂被甕
25号	○		△	老年♂被甕
26号			△	小児 被甕
27号			△	被甕なし木槨
28号			○	小児 被甕
29号			○	小児 被甕
30号			△	成年♂被甕